

小雨交じりの名古屋の街を私は夢見心地で歩いていた。前日のコンサートが劇場中、総立ちで終わったことにいまだ興奮が冷めなかったからだ。

練習を重ね、毎回、全身全霊で演奏に臨むが、会場中が1つになり、スタンディングにまで達する演奏会はなかなかない。

感謝を胸に、私はかねて訪れたかったノリタケミュージアムへと向かった。どうしても、今回の成功を報告したい相手があった。日本が誇る洋食器のブランド、ノリタケ。そのオールドコレクションに会いたかった。

初めて出会ったのは1985年のヨーロッパ。その後も私は欧米の多くの美術館でノリタケに出会い、そのたびに日本人としての誇りと感動を味わった。

明治37年に日本で初めて高級洋食器を作った会社を前身

「ノリタケ」は日本人の誇り



に持つノリタケ。20世紀初頭、その作品は欧米でも絶大な人気を誇った。しかし、明治まで洋食器を全く知らなかった日本人が、どうやってあれほどまでに素晴らしい作品を生み出したのだろうか。

創業者の森村市左衛門は江戸時代末期、富国のためにも輸出貿易を決意した。後に純白の洋食器作りに着手するが、その純白生地の実現や大皿を作る技術獲得までには血のにじむ努力があり、ディナーセット「セダン」完成まで10年という時を経た。

17世紀のヨーロッパでは既に中国の磁器や日本の伊万里などが大変もてはやされていた。ドイツのザクセン選帝

侯、アウグスト王は東洋磁器の屈指の収集家で、兵士600人とプロイセン王所有の中国の壺151個を交換したという逸話もあるほどだ。そして、純白で薄い硬質磁器はヨーロッパでは当時まだ作り出せず、製法を見つけるため、躍起になっていた。

ノリタケチャイナは幾多の困難にもくじけず、ひたすら未来を信じ、邁進した先駆者たちの熱い思いの結晶だと記してあった。この気概を胸に私も人の心を動かす歌を歌いたい。

(さとう・しのぶ＝声楽家)
—毎月第3金曜日掲載

